

## 65 『僧深方』——『医心方』『外台秘要方』からの輯佚

多田 伊織

皇學館大学文学部国史学科

本発表では、佚書『僧深方』の輯佚を通して、大部の医学全書である日本の『医心方』と唐の『外台秘要方』の編纂意図の違いと、同じ『僧深方』が、二書の間ではどう異なるか、そして六朝期、劉宋から南齊の間に活躍したとされる僧侶「僧深」の手になる『僧深方』が一体いかなる医学書であったかを、考察したい。

丹波康頼『医心方』三十卷（永観二年 984年進上）は、現存する日本最古の医学全集である。先行する中国・朝鮮・日本の医学書からの引用で成り立つ本書は、唐・王焘の『外台秘要方』四十卷（天宝十一年 752年成立）との類似性が以前より指摘されている。

『医心方』と『外台秘要方』が、すでに散逸した唐代までの医学書の宝庫であることは言うまでもない。『隋書』経籍志に三十巻と著録される『僧深方』は、藤原佐世『日本国見在書目録』（寛平九年 897年までに成立）にも「方集 廿九 尺僧深撰」として著録されている。『医心方』が重要なのは、北宋の校正医書局による改訂を経ていない、遣唐使将来の原本の系統から引用されている点である。今利用できる最も古い『外台秘要方』でも、校正医書局の改変を受けた、北宋もしくは南宋初まで下がった時代の版本である。

幕府医学館で幕末に半井家本『医心方』模刻が行われた際、『医心方』は単方を中心とすることが注意されていた。『僧深方』輯佚に当たって、同じ症状に対する『外台秘要方』と『医心方』の処方との相違を検討しているが、『医心方』所引の『僧深方』は、単純な処方の方を多く選んでいる。これは日本医学の後進性を示すというより、処方が簡単で、すぐに使える単方を、丹波康頼が選んだ、と演者は考えている。単方をまとめた医書は需要があり、『隋書』経籍志にも、北魏・王頊の『王世榮単方一卷』、隋・許澄『備急単要方三卷』などが見える。ただし、他に代替が効かない一部の特殊な処方については、『医心方』は『僧深方』から長文を引用する。こうした処方の一つに、道教系統の万能薬「西王母玉壺赤丸」（巻十四 治注病方第十一所引）がある。『僧深方』がこの処方を引用するのは、仏教が中国で拡大した六朝期に、医学の分野で、道・仏の交流が盛んに行われていたことを示唆する。これは当時の僧侶・道士の社会的役割と出身階層を考える上で重要である。

『医心方』が『外台秘要方』を参照したと考えられる箇所は、巻四の「治髮令生長方第一」以下美容に関する部分などである。しかし、ここでも、丹波康頼は、『外台秘要方』を引き写すのではなく、同じ薬方に対し『外台秘要方』とは異なった出典を探して編纂しようとしている。『医心方』が『外台秘要方』を引くのは、五・六カ所（数え方によって異なる）であり、残りは、類似の処方であっても、できるだけ別な原典に当たっている。

『僧深方』など古医書輯佚に際して、「又云」「又方」という記述が問題になるのだが、八重津洋平氏の「故唐律疏議」（滋賀秀三編『中国法制史 基本資料の研究』東京大学出版会）によると、敦煌・トルファンから出土した唐代の律疏では、律文を分割して議論する場合、第二段以下の律文の部分の頭には「又云」の二字を冠する。恐らく、『外台秘要方』や『医心方』の「又云」「又方」も、唐代のこうした書式に倣ったものと考えて良いだろう。

『医心方』は、日本に渡来した唐代までの中国・朝鮮の医学文献を基に、日本の実情に合わせ、庶民から貴族まで、手近な薬草から、高貴薬までを含む、あらゆる階層の患者に対応した薬方を取める。丹波康頼が目指したのは、医学に精通していなくても、開きさえすれば、治療法が見つかる便利な書物であった。（本発表は平成二十二年度独立法人日本学術振興会科学研究費〔課題番号20652004〕による成果の一部である。）